



◆ ランカスター通信 ◆

「海外経験と英語研修」

投野 由紀夫

今回は海外での英語研修について考えたことを書いてみる。最近、海外研修の機会を英語教師もかなり頻繁にもてるようになってきた。私が以前勤務していた東京学芸大学でも、学生の半数以上が4年間の学部在学中に何らかの機会を生かして留学している。広島大学では半年以上の海外留学を全員に講座のカリキュラムとして課している。

ランカスター大学にも毎年短期で文部省から派遣された中学・高校の先生方が研修にみえる。ある時研修に来た先生方に「研修はどうですか？」ときいてみると「文部省の先生方で1部屋もらっていて快適です」と言っていた。よくよく話を聞いてみると、語学センターの1室で文部省派遣の教員だけを詰め込んで授業が行われるのだそうだ。「いろんな国の人と交わらないで、日本人だけで固まる傾向があるのに、なぜそれを助長するような指導のしかたをするんだろう？」と思って、語学センターの研修担当の人に質問してみたことがある。彼は「日本人は初めて海外に来ると順応できなくて他国の人と混ぜるよりも日本人同志で同じグループや部屋にした方が相談し合って作業などができて効果的だ」と言っていた。

私は別にこの方法が一概に悪いというつもりはない。ただ、気になるのは海外に来れば何とかなる、という短絡的な研修や留学のイメージがまかりとおっていることだ。実は、いろいろな人に聞いてみればわかるが、日本人の海外語学研修はなるべく異文化ストレスをかけないようにできていることが多い。海外の私立高校や大学の extension は往々にして日本人学生が固まっており、現地の学生との交流はお印だけだ。文部省の研修でもよほど自分から出て行って英語を使う努力をしないと、1部屋で日本人のみでネイティブから指導を受けるだけで日本で英会話学校に行っているのと大差ない。

博士課程のレベルだって安心してはいられないのだ。日本人学生の多いところでは、やはり日本人は固まる傾向がある。ランカスターでも taught

course のない PhD の学生は非常に孤独な研究生を送ることになり、自分のオフィスに1日こもってあれば英語を実際に話したりする機会は限られてしまう。ましてや、department の粹な(?) はからいで日本人同志で同じオフィスをシェアするなどということになったら悲劇だ。もうまともに英語を話したのは advisor に会った2週間前だった、などと笑ってられない事態になることだっている。

そういう欠点を知っている日本人学生は、なるべく他の国の学生と交わる環境を作るように心がけている。私も、advisor との2週間おきのミーティング以外に、オフィスでは日本人の PhD の友人とは原則的にお互いのために英語で話すようにしている。読書などで意識的に語彙を増やして、それを実際の生活でどんどん使うようなことをしていけないと、ただ漫然と海外に来て暮らしていても、英語は伸びていかない、ということを感じているのだ。

海外研修は結構だ。「日本国内では英語の骨組みをきちんとやって、使いこなしは海外で」という議論も、基本線は正しい。しかし、海外に放り出す、その放り出し方をもう少し工夫すべきだ。メンタルな負担を極力減らすのはかまわないけれども、海外での一人になる孤独感、言葉の伝わらない焦燥、そういうストレスを処理して出て行って友人をゲットするようなプロセスをある程度経ないと、言葉の壁は破れない気がする。そういった意味で、海外研修がオブラートに包んで極上の包装紙で包まれたような中身が何かわからないものが多そうな昨今に多少不安な気持ちがするのだ。